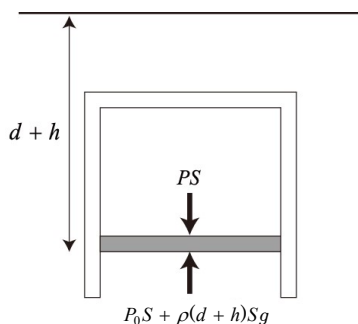


1 浮力と気体の状態変化

(1)① ピストンにはたらく水圧は、大気圧も考慮して、 $P_0 + \rho(d+h)g$ である。シリンダーのピストンにはたらく力のつり合いより、

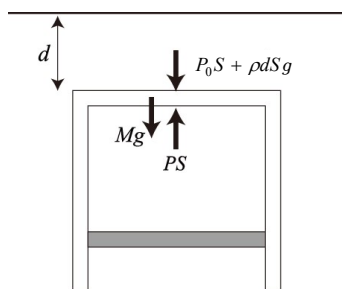


$$PS = P_0S + \rho(d+h)Sg \quad \therefore P = P_0 + \rho(d+h)g$$

気体の状態方程式より、

$$PSh = nRT \quad T = \frac{\{P_0 + \rho(d+h)g\}Sh}{nR}$$

② シリンダーの上面にはたらく水圧は、 $P_0 + \rho dg$ である。シリンダーの底にはたらく力のつり合いより、



$$PS = P_0S + \rho dSg + Mg \quad \therefore M = \rho Sh$$

(2)① シリンダーの底が液面下 d_1 、シリンダーのピストンが液面下 h_1 になったとすると、(1)と同様に、シリンダーのピストンまたは底にはたらく力のつり合いより、

$$P_0S + \frac{Wg}{S_0}S + \rho(d_1 + h_1)Sg = P_1S$$

$$P_0S + \frac{Wg}{S_0}S + \rho d_1Sg + Mg = P_1S$$

2式より、

$$\rho h_1Sg = Mg \quad \therefore h_1 = h$$

よって、シリンダー内の気体の体積は、

$$V_1 = Sh$$

また、状態方程式より、

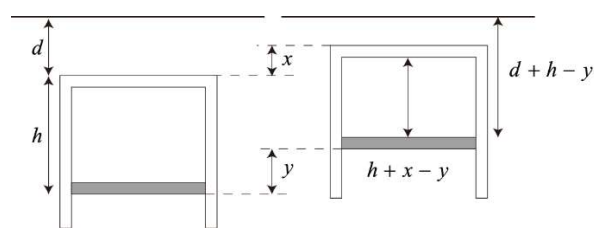
$$P_1 = \frac{nRT_1}{Sh}$$

② ①の式より、

$$\frac{nRT_1}{Sh} = \frac{Wg}{S_0} + P_0 + \rho(d+h)g$$

$$\therefore W = \frac{S_0}{g} \left\{ \frac{nRT_1}{Sh} - P_0 - \rho(d+h)g \right\}$$

(3)



① シリンダーのピストンにはたらく力のつり合いより、 $P_2S = P_0S + \rho(d+h-y)Sg$

(1)より、

$$P_2S = PS - \rho ySg$$

また、気体の温度は一定なので、ボイルの法則より、

$$PSh = P_2S(h+x-y)$$

$$PSh = (PS - \rho ySg)(h+x-y)$$

$$= PS(h+x-y) - \rho hySg - \rho xySg + \rho y^2Sg$$

$$\cong PS(h+x-y) - \rho hySg$$

$$\therefore x = \frac{P + \rho hg}{P} y$$

② シリンダーのピストンにはたらく力は、

$$F_1 = P_0S + \rho(d+h-y)Sg - P_2S$$

シリンダーの底にはたらく力は、

$$F_2 = P_2S - P_0S - \rho(d-x)Sg - Mg$$

よって、シリンダーにはたらく合力は、

$$F = F_1 + F_2 = \rho(x-y)Sg$$

①の結果より、

$$F = \frac{\rho^2 Shg^2}{P + \rho hg} x$$

理由：合力 F は変位 x に対して同符号をもち、正比例するので、復元力とならず不安定。

2 混合気体の状態変化

(1) コックを開く前の A の温度を T_0 として、状態方程式より、

$$P_0V_0 = nRT_0 \quad \therefore T_0 = \frac{P_0V_0}{nR}$$

コックを開けたとき、断熱自由膨張なの

で、温度変化はない。よって、 $T_1 = T_0 = \frac{P_0V_0}{nR}$

また、状態 Z_1 での状態方程式より、

$$P_1 \times 2V_0 = nRT_1 \quad \therefore P_1 = \frac{1}{2}P_0$$

(2) 断熱板にはたらく力のつり合いより、

$$P_2S = mg \quad \therefore P_2 = \frac{mg}{S}$$

状態方程式より、

$$P_2 \times 2V_0 = nRT_2 \quad \therefore T_2 = \frac{2P_2V_0}{nR} = \frac{2V_0mg}{nRS}$$

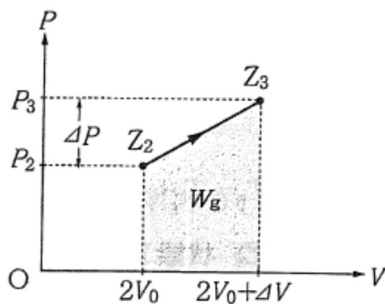
(3) ① 状態 Z_3 の圧力を P_3 とする。ばねの縮みは $\frac{\Delta V}{S}$ なので、力のつり合いより、

$$P_3S = mg + k \frac{\Delta V}{S} \quad P_3 = \frac{mg}{S} + k \frac{\Delta V}{S^2}$$

よって、求める ΔP は、

$$\Delta P = P_3 - P_2 = k \frac{\Delta V}{S^2}$$

② ①より、 $P-V$ 図を描くと以下のようになる。



グラフより、

$$W_g = \frac{1}{2}(P_2 + P_3)\Delta V = \left(P_2 + \frac{1}{2}\Delta P\right)\Delta V$$

③ 熱力学第1法則より、

$$Q_h = \frac{3}{2}nR(T_3 - T_2) + W_g$$

$$= 3V_0\Delta P + \frac{3}{2}(P_2 + \Delta P)\Delta V + W_g$$

$$= \frac{5}{2}P_2\Delta V + 3V_0\Delta P + 2\Delta P\Delta V$$

④ コックを閉めたので、気体のモル数は $\frac{n}{2}$

になっている。熱力学第1法則より、

$$0 = \frac{3}{2} \times \frac{n}{2} R(T_4 - T_2) + (-W_m)$$

$$\therefore T_4 = T_2 + \frac{4W_m}{3nR}$$

(5) 共に、状態 Z_2 から最終的に同じ状態となるので、(3)③で加えた熱量 Q_h と(4)で加えた仕事 W_m は、等しくならなければならない。よって、

$$W_m = Q_h$$

③断熱変化を含む熱サイクル

(1)

ア. 等温変化の状態方程式より, $pV = nRT_L$ より,

$$p = \frac{nRT_L}{V}$$

題意より,

$$\begin{aligned} W_{12} &= \int_{V_1}^{V_2} p dV = nRT_L \log_e \frac{2V_1}{V_1} \\ &= nRT_L \log_e 2 \end{aligned}$$

イ. $\Delta U = 0$ なので, 熱力学第1法則より,

$$Q_{12} = W_{12}$$

ウ. 定積変化なので,

$$Q_{23} = nC_v \Delta T_{23} = \frac{3}{2} nR(T_H - T_L)$$

(2)

エ. $p = \frac{nRT_H}{V}$ なので, (ア)と同様にして,

$$W_{34} = nRT_H \log_e \frac{V_1}{2V_1} = -nRT_H \log_e 2$$

等温変化なので, $\Delta U = 0$ なので, 熱力学第1法則より,

$$Q_{34} = W_{34} = -nRT_H \log_e 2$$

オ. 定積変化なので,

$$Q_{41} = nC_v \Delta T_{41} = \frac{3}{2} nR(T_L - T_H)$$

(3)

カ. $W_X = -(W_{12} + W_{34}) = nR(T_H - T_L) \log_e 2$

キ. $Q_{34} < 0$ であり, $T_L < T_H$ なので, $Q_{41} < 0$ によって,

$$Q_H = Q_{34} + Q_{41} < 0$$

ク. $Q_{12} > 0$ であり, $T_L < T_H$ なので, $Q_{23} > 0$ によって,

$$Q_L = Q_{12} + Q_{23} > 0$$

シ. $Q_L = Q_{12} + Q_{23}$

$$= nR \left\{ T_L \log_e 2 + \frac{3}{2} (T_H - T_L) \right\}$$

$$\therefore \left| \frac{Q_L}{W_X} \right| = \frac{T_L \log_e 2 + \frac{3}{2} (T_H - T_L)}{(T_H - T_L) \log_e 2}$$

$$= \frac{T_L}{T_H - T_L} + \frac{3}{2 \log_e 2}$$

4 断熱微小振動

イ. 状態 1 から状態 2 への変化は断熱圧縮なので、
温度は上昇する。∴ $T_1 < T_2$

状態 2 から状態 3 への変化は定圧膨張なので、
ボイルシャルルの法則より、温度は上昇する。
∴ $T_2 < T_3$

以上より、 $T_1 < T_2 < T_3$

□. ②

ハ. 状態 2 から状態 3 への変化は定圧変化なので、

$$W_{23} = p\Delta V = nR\Delta T = R(T_3 - T_2)$$

ニ. ①

ホ. 状態 1 から状態 2 への変化は断熱変化なので、
熱力学第 1 法則より、

$$0 = W_{12} + \Delta U_{12} \quad \therefore W_{12} = -\Delta U_{12}$$

よって、 $|W_{12}| = |\Delta U_{12}| = C_V(T_2 - T_1)$

ヘ. 球が静止位置から y 下がったときの圧力を
 $p + \Delta p$ とすると、体積は $V - Ay$ なので、

$$pV^\gamma = (p + \Delta p)(V - Ay)^\gamma$$

$$\therefore \Delta p = p \left(\frac{V}{V - Ay} \right)^\gamma - p$$

よって、球にはたらく力は、大気圧を p_0 とすると、

$$F = mg + p_0 A - (p + \Delta p)A$$

ここで、始めの静止状態より、 $pA = mg + p_0 A$
なので、

$$F = \left\{ 1 - \left(\frac{V}{V - Ay} \right)^\gamma \right\} pA$$

ト. 状態方程式より、

$$\text{静止状態のとき} : pV = nRT_0$$

$$y \text{ 下がったとき} : (p + \Delta p)(V - Ay) = nRT$$

$$\therefore T - T_0 = \frac{\Delta p(V - Ay) - pAy}{nR}$$

$$= \frac{pV}{nR} \left\{ \left(\frac{V}{V - Ay} \right)^\gamma - 1 \right\}$$

チ. (ハ) より、

$$F = \left\{ 1 - \left(1 - \frac{Ay}{V} \right)^{-\gamma} \right\} pA \doteq \left\{ 1 - \left(1 + \gamma \frac{Ay}{V} \right) \right\} pA$$

$$= -\frac{\gamma pA^2}{V} y$$

リ. (フ) より、単振動の角振動数は、 $\omega = \sqrt{\frac{\gamma pA^2}{mV}}$ な

ので、周期は、

$$t = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi \sqrt{\frac{mV}{\gamma pA^2}} \quad \therefore \gamma = \frac{4\pi^2 mV}{A^2 p t^2}$$

又. $t = 2\pi \sqrt{\frac{mV}{\gamma pA^2}}$

$$= \frac{2\pi}{\pi \times (6.0 \times 10^{-3})^2} \sqrt{\frac{1.0 \times 10^2 \times 5.6 \times 10^{-3}}{1.4 \times 1.0 \times 10^5}} \doteq 1.1 [\text{s}]$$

ル. 気体がなされた仕事は、(ホ)と同様にして、

$$W = nC_V(T - T_0) = \frac{C_V pV}{R} \left\{ \left(\frac{V}{V - Ay} \right)^{\gamma-1} - 1 \right\}$$

$$= \frac{C_V pV}{R} \left\{ \left(1 - \frac{Ay}{V} \right)^{-(\gamma-1)} - 1 \right\}$$

$$\doteq \frac{C_V pV}{R} \left\{ \left(1 + (\gamma-1) \frac{Ay}{V} \right) - 1 \right\}$$

$$= \frac{C_V (\gamma-1) Ap}{R} y$$

ヲ. 題意より、

$$pAy = \frac{C_V (\gamma-1) Ap}{R} y \quad \therefore \gamma = 1 + \frac{R}{C_V}$$

5 平面波の干渉

(1)

(a) (エ)

(b) プリズム中の屈折率が1より大きいので、プリズム中の波長が空气中より短くなるように、屈折するから。

(2)

(a) $\lambda_p = \frac{\lambda}{n_p}$

(b) 屈折の法則より、

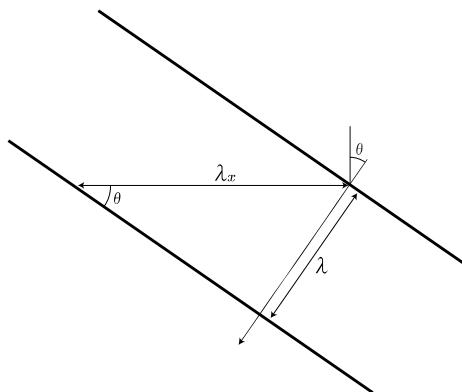
$$n_p \sin \alpha = \sin(\alpha + \theta)$$

与えられた近似より、

$$n_p \alpha = \alpha + \theta$$

$$\therefore \theta = (n_p - 1)\alpha$$

(c) 平面波のスクリーンに平行方向の波長は、

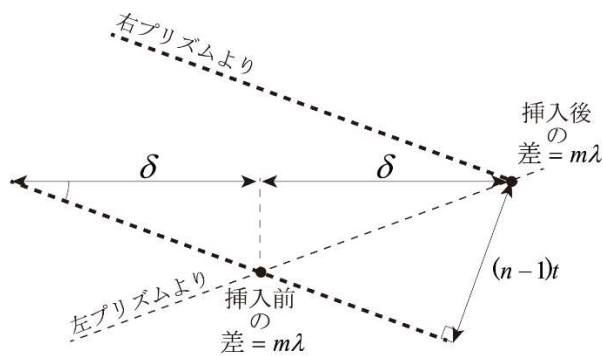


$$\lambda_x = \frac{\lambda}{\sin \theta} \doteq \frac{\lambda}{\theta}$$

スクリーン上では、右プリズムを通った波面は左向きに、左プリズムを通った波面は右向きに動き、定常波が生じる。求める距離はこの定常波の腹から腹までの距離なので、

$$l = k \times \frac{\lambda_x}{2} = \frac{k\lambda}{2\theta}$$

(d)



右プリズムから進む光は、挿入前の光路長に比べて、薄膜を挿入後の光路長は $(n-1)t$ だけ長くなる。つまり、挿入前に干渉条件 $|\text{差}| = m\lambda$ を満たす点は、挿入後、図のような位置にずれることになる。よって、ずれる方向は、紙面に向かって右側。

また、図より

$$2\delta \sin \theta = (n-1)t$$

近似して、

$$2\delta\theta = (n-1)t \quad \therefore n = \frac{2\delta\theta}{t} + 1$$

ここで、隣り合う干渉縞を考えているので、(b)より、 $k=1$ として、

$$2\theta = \frac{\lambda}{d}$$

なので、

$$n = \frac{\delta\lambda}{dt} + 1$$

6 位相差による干渉

I 問1 $\theta = \omega t = 2\pi f t$

問2 レーザー光が A, B を進む時間は, $\frac{x}{c}$

問1 より, 2 点の位相差は,

$$\phi = 2\pi f \times \frac{x}{c} = \frac{2\pi f}{c} x$$

II

問3 M_1 へ向かう光と M_2 へ向かう光の光路差は, $2|L_1 - L_2|$ なので, 問2 より

$$\phi = \frac{4\pi f}{c} |L_1 - L_2|$$

問4 M_1 に向かう光の光路長が $2(n-1)d$ だけ長くなるので, 位相の変化は,

$$\Delta\phi = \frac{4\pi(n-1)df}{c}$$

III 問5

光源から出た光が M_1 に達する時刻を t_1 , その後 M_1 で反射した光が検出器 D に達する時刻を t とすると,

$$c(t - t_1) = L_1 - vt_1 + L_D \quad \therefore t_1 = \frac{L_1 + L_D - ct}{v - c}$$

よって, M_1 で反射する光の光路長は, $L_1 \rightarrow L_1 - vt_1$ と考えて,

$$L_1 - vt_1 = \frac{-cL_1 - vL_D + cvt}{v - c} = \frac{-L_1 - \frac{v}{c}L_D + vt}{\frac{v}{c} - 1} \doteq L_1 - vt$$

$$\therefore \phi = \frac{4\pi f}{c} |L_1 - L_2 - vt|$$

【別解】 M_1 に向かう光の光路長が, $2(L_1 - vt)$ になるので, 問3 より,

$$\phi = \frac{4\pi f}{c} |L_1 - L_2 - vt|$$

問6 問5 より位相の変化は, $\Delta\phi = \frac{4\pi f}{c} vt$

なので, $t \rightarrow T$ のとき, $\Delta\phi \rightarrow 2\pi$ より,

$$2\pi = \frac{4\pi f}{c} vT \quad \therefore T = \frac{c}{2fv}$$

$$\therefore b = \frac{1}{T} = \frac{2fv}{c}$$

7 単スリットの原理

問1

スリットの上半分と、下半分から出た光が打ち消し合うので、

$$\frac{D}{2} \sin \theta_0 = \frac{\lambda}{2}$$

$$\therefore \sin \theta_0 = \frac{\lambda}{D}$$

問2 $D \sin \theta = \frac{\lambda}{2} \times 2m$ のとき、 D を $2m$ 個の部分

に等分すると、それぞれ隣り合う部分を通る光が問1の関係を満たして打ち消し合うから。

問3

2本の光の光路差は、

$$a(\sin \theta - \sin \phi)$$

なので、

$$a(\sin \theta - \sin \phi) = n\lambda \quad (n = 1, 2, \dots)$$

問4

問3において、 $n = 2$ のとき、

$$a(\sin \theta - \sin \phi) = 2\lambda \cdots \textcircled{1}$$

また、単スリットとして打ち消し合う条件は、

$$D(\sin \theta - \sin \phi) = m\lambda \cdots \textcircled{2}$$

①より、

$$\sin \theta - \sin \phi = \frac{2\lambda}{a}$$

①かつ②を満たせばよいので、

$$D = \frac{m\lambda}{\sin \theta - \sin \phi} = \frac{ma}{2}$$

ここで、 $D < a$ なので、

$$D = \frac{a}{2}$$

8 回折格子

[1]

(1) 回折格子の干渉条件より,

$$d \sin \theta = m \lambda$$

$m = 1$, $\sin \theta \doteq \tan \theta$ として,

$$d \tan \theta = \frac{dy}{L} = \lambda \quad \therefore y = \frac{L \lambda}{d}$$

(2) $y = \frac{1000 \times 600 \times 10^{-6}}{30 \times 10^{-3}} = 20[\text{mm}]$

(3) 干渉条件 $d \sin \theta = m \lambda$ より,

$$\sin \theta = \frac{m \lambda}{d}$$

$\sin \theta \leq 1$ なので,

$$\frac{m \lambda}{d} \leq 1$$

つまり, $d < \lambda$ であれば, $m = 0$ 以外では成立しない。よって, 求める d は,

$$d = \lambda = 600[\text{nm}] = 0.6[\mu\text{m}]$$

(4) すべての可視光線が強め合うので, 白

(5) 波長が短いほど明線間隔が狭いので, 紫

(6) +1 次光の干渉条件は, $d \sin \theta = \lambda$ であり,

$$380[\text{nm}] \leq \lambda \leq 780[\text{nm}]$$

+2 次光では, $d \sin \theta = 2\lambda$ なので,

$$760[\text{nm}] \leq 2\lambda \leq 1560[\text{nm}]$$

よって, 重複する範囲は $760 \sim 780[\text{nm}]$ なので,

+1 次光は $760 \sim 780[\text{nm}]$

+2 次光は $380 \sim 390[\text{nm}]$

[2]

(1) $ct - \lambda$

(2) 余弦定理より,

$$(ct - \lambda)^2 = d^2 + (ct)^2 - 2cdt \cos \phi$$

$$\therefore \cos \phi = \frac{d^2 + (ct)^2 - (ct - \lambda)^2}{2cdt}$$

$$= \frac{\lambda}{d} + \frac{1}{t} \times \frac{d^2 - \lambda^2}{2cd}$$

(3) $\sin \theta_{i1} = \cos\left(\frac{\pi}{2} - \theta_{i1}\right)$

$$= \frac{(id)^2 + (ct)^2 - (ct - i\lambda)^2}{2c \times (id)t} = \frac{\lambda}{d} + \frac{1}{t} \times \frac{i(d^2 - \lambda^2)}{2cd}$$

$$(4) \lim_{t \rightarrow \infty} \left\{ \frac{\lambda}{d} + \frac{1}{t} \times \frac{i(d^2 - \lambda^2)}{2cd} \right\} = \frac{\lambda}{d}$$

$$(5) \sin \theta_{ij} = \frac{(id)^2 + c^2 t^2 - (ct - ij\lambda)^2}{2c \times (id)t}$$

$$= \frac{j\lambda}{d} + \frac{1}{t} \times \frac{i(d^2 - j^2 \lambda^2)}{2cd}$$

$$(6) \lim_{t \rightarrow \infty} \left\{ \frac{j\lambda}{d} + \frac{1}{t} \times \frac{i(d^2 - j^2 \lambda^2)}{2cd} \right\} = \frac{j\lambda}{d}$$

よって,

$$d \sin \theta_{ij} = d \times \frac{j\lambda}{d} = j\lambda$$

より, $m = j$

9 波の式とドップラー効果

(1) (a)

ア. イ. 問題の④式に③式を代入して,

$$A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft + \frac{L}{\lambda}\right)\right\} + A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft - \frac{L}{\lambda}\right)\right\} = 0$$

加法定理より,

$$2A_1 \sin(2\pi ft) \cos\left(2\pi \frac{L}{\lambda}\right) = 0$$

ウ. 任意の t に対して上式が成立するためには,

$$\cos\left(\frac{2\pi L}{\lambda}\right) = 0$$

$$\text{すなわち, } \frac{2\pi L}{\lambda} = \frac{2m-1}{2}\pi \quad \therefore \lambda = \frac{4L}{2m-1}$$

エ. オ. 題意より,

$$F(t, x) =$$

$$A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft + \frac{x}{\lambda}\right)\right\} - A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft - \frac{x}{\lambda}\right)\right\}$$

加法定理を用いて, $\lambda = \frac{4L}{2m-1}$ とすると,

$$\begin{aligned} F(t, x) &= 2A_1 \sin \frac{2\pi x}{\lambda} \cos 2\pi ft \\ &= 2A_1 \sin\left(\frac{2m-1}{2L}\pi x\right) \cos(2\pi ft) \end{aligned}$$

(b) $m = 3$ のとき, 問題の⑦式より,

$$\lambda = \frac{4L}{2 \times 3 - 1} = \frac{4}{5}L$$

固定端反射する $x = 0$ には節ができ, $x = 0$ から $\frac{\lambda}{2}$ ごとに節ができるので, 管の長さは L であ

るから, $x = 0, \frac{2}{5}L, \frac{4}{5}L$

(c) 開管の場合 $A_1 = A_2$ となるから,

$$A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft + \frac{L}{\lambda}\right)\right\} - A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft - \frac{L}{\lambda}\right)\right\} = 0$$

加法定理より,

$$2A_1 \sin\left(\frac{2\pi L}{\lambda}\right) \cos(2\pi ft) = 0$$

任意の t に対して上式が成立するためには,

$$\sin\left(\frac{2\pi L}{\lambda}\right) = 0$$

$$\text{すなわち, } \frac{2\pi L}{\lambda} = n\pi \quad \therefore \lambda = \frac{2L}{n}$$

開管内の波全体に関して,

$$F(t, x) =$$

$$A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft + \frac{x}{\lambda}\right)\right\} + A_1 \sin\left\{2\pi\left(ft - \frac{x}{\lambda}\right)\right\}$$

$$= 2A_1 \sin(2\pi ft) \cos\left(\frac{2\pi x}{\lambda}\right)$$

$$= 2A_1 \sin(2\pi ft) \cos\left(\frac{\pi x}{L}\right)$$

(2) (a) 音源が円筒管から遠ざかるときの波長を

λ_1 とすると, $\lambda_1 = \frac{V + v_s}{f_s}$ であり, 閉管に m 個の

節をもつ定常波が生じて共鳴が起きたことにより,

$$\frac{V + v_s}{f_s} = \frac{4L}{2m-1}$$

音源が円筒管に近づくときの波長を λ_2 とす

ると, $\lambda_2 = \frac{V - v_s}{f_s}$ であり, 開管に n 個の節を

もつ定常波が生じて共鳴が起きたことより,

$$\frac{V - v_s}{f_s} = \frac{2L}{n}$$

以上2式より,

$$\frac{v_s}{V} = \frac{2(n-m)+1}{2(n+m)-1}$$

(b) $300\text{Hz} \leq f_s \leq 400\text{Hz}$ と $V = 340\text{m/s}$ より,

$$\frac{340}{400} \leq \frac{V}{f_s} \leq \frac{340}{300}$$

よって, 波長 $\lambda_1 = \frac{V}{f_s} + \frac{v_s}{f_s}$ の範囲は,

$v_s \leq \frac{1}{3}V$ も考慮して,

$$\frac{340}{400} \leq \lambda_1 \leq \frac{340}{300}\left(1 + \frac{1}{3}\right)$$

一方, 共鳴が起きたことから, $\lambda_1 = \frac{4L}{2m-1}$

で, $L = 1\text{m}$ より, $\lambda_1 = \frac{4}{2m-1}$ なので,

$$0.85 \leq \frac{4}{2m-1} \leq 1.51$$

$$\frac{4}{1.51} \leq 2m-1 \leq \frac{4}{0.85}$$

この式を満たすのは、 $m = 2$

(c) $m = 2$ のとき、(2)(a) と $v_s \leq \frac{1}{3}V$ より、

$$\frac{v_s}{V} = \frac{2(n-2)+1}{2(n+2)-1} = \frac{2n-3}{2n+3} \leq \frac{1}{3}$$

よって、 $n \leq 3$

一方、波長 $\lambda_2 = \frac{V}{f_s} - \frac{v_s}{f_s}$ の範囲は $v_s \leq \frac{1}{3}V$ を

用いて、

$$\frac{340}{400} \left(1 - \frac{1}{3}\right) \leq \lambda_2 \leq \frac{340}{300}$$

ここで、共鳴が起きたことから、 $\lambda_2 = \frac{2L}{n}$ で

$L = 1\text{m}$ より、 $\lambda_2 = \frac{2}{n}$ なので、

$$\frac{340}{400} \left(1 - \frac{1}{3}\right) \leq \frac{2}{n} \leq \frac{340}{300} \quad \therefore 1.8 < n < 3.5$$

以上を満たす整数値は $n = 2$ および $n = 3$ である。

$n = 2$ のとき、 $\lambda_2 = \frac{2}{2} = 1\text{m}$ 、 $\frac{v_s}{V} = \frac{1}{7}$ なの

で、

$$f_s = V - v_s = \left(1 - \frac{1}{7}\right)V = \frac{6}{7} \times 340 < 300\text{Hz}$$

となり、不適。

$n = 3$ のとき、 $\lambda_2 = \frac{2}{3}\text{m}$ 、 $\frac{v_s}{V} = \frac{1}{3}$ なので、

$$f_s = \frac{V - v_s}{\frac{2}{3}} = \frac{3}{2} \left(1 - \frac{1}{3}\right)V = 340\text{Hz}$$